

札幌市立伏見小学校の取組

1 道徳科の指導について

・授業で身に付けさせたい力

人はつながりの中で他者、社会、自然と関わり合い、物の見方や考え方を広げる。また、道徳科の学習を通して、自己を客観的・分析的に捉えたり、これまでの価値観を見つめ直したりする。こういった経験によって、道徳的事象について「多面的・多角的な見方や考え方」が深まり広がっていくのである。さらに、自分との関わりで道徳的価値の理解を深めたり、自分自身の体験に伴う「多面的・多角的な見方や考え方」を想起したりできる道徳科の学習にすることで、よりよい自己の生き方についての考えを深めることができると考える。「道徳的価値観」は、価値理解・人間理解・他者理解を深めながら、よりよく生きるために様々な事象の中で状況を深く見つめ、自分はどうすべきか判断し、実行する手だてを考え取り組めるようにする意欲や態度と考える。道徳科の学習で、これまで築かれてきた価値観と道徳的価値の理解を基にしながら、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることで、道徳的価値観が形成され、自己の生き方について考えを深めるのである。そうして得た道徳的価値観を、違う側面から捉え直したり再認識して自覚したりする道徳科の学習にしていきたい。

・多様な学習展開

道徳科の学習では、自己や他者との対話を通して、様々な考えに触れ自分との関わりで考え、学習していくことが重要である。教師は、その教材でねらいとする道徳的価値が深まる登場人物の行動や言動はどこなのか、それをどのように問い、子どもがどのように捉えるのかを考える必要がある。教材との出会いから、子どもは自分と対話しながら様々な思いをもつ。その思いを聞き合うことは、他者との対話である。自分以外の考えを聞くことで、子どもの見方や考え方が広がっていく。しかし、思考が拡散したままでは、本時で学ぶ道徳的価値に深まりは生まれない。主題構成の中で育まれてきた道徳的価値に触れる補助発問をすることで、子どもの考えを焦点化し、問題意識を生むようにする。そうすることで、子どもは自分との関わりでねらいとする道徳的価値について考え、見方や考え方が広がっていくと考える。

2 道徳科の評価について

・評価の工夫と留意点

毎時間、学校として統一されたワークシートを使用し、子どもが振り返りを記入する。これを基に大きくくりなまとまりで評価していく。個人の目標に対して、道徳的価値についての考えが顕著に表れているものや、個人の道徳的価値に対する考えが変容したり成長したりしている様子を見取っていく。書くことに抵抗がある児童や支援が必要な児童もいるため、板書にネームカードを貼り、毎時間の板書を写真に撮っておくことや、ワークシート返却時に児童と本時について話したりすることも有効である。

・校内で共通理解を図るための手だて

本校では、通年での評価となっている。担任によって通知表での伝え方に差が出ないよう、年間2回の評価研修会を行った。学習指導要領にある7つの視点を基に例文を作成し、教師間で共有した。次年度は、それぞれの教師が作成した評価文を交流し、よりよい伝え方や記述の仕方について研修していく。